

大阪府住宅まちづくり審議会 第1回課題検討部会 議事録 概要

日 時：平成30年11月15日（木）14時00分～15時30分

場 所：大阪府庁本館5階 議会会議室1

議 事：1. 課題検討部会の進め方

- (1) 部会長の選出
 - (2) 第41回審議会の委員意見まとめ
 - (3) 今後の進め方
2. 課題検討
- (1) 単独世帯の増加や世帯の多様化に応じた住まい・まちづくり
 - (2) 住まい・まちづくりと健康との関係性
3. その他

【開会】

- ・委員出席状況 委員11名のうち9名出席
(欠席委員：清水委員、三浦委員)

【議事】

1. 課題検討部会の進め方

(1) 部会長の選出

発言者	意見概要
事務局	・審議会会長の高田委員に部会長をお願いできればと考えているが、いかがか。
委員	(異議なし)
事務局	・皆様、ご賛同ということで、高田委員に部会長をお願いします。

(2) 第41回審議会の委員意見まとめ

(3) 今後の進め方

意見なし

2. 課題検討

(1) 単独世帯の増加や世帯の多様化に応じた住まい・まちづくり

発言者	意見概要
委員	・ニーズをちゃんとつかんでいるかわからないところに不安がある。インターネットアンケートでも自由記述や、住宅供給・福祉・医療関係者へのインタビュー調査でしっかり拾わないといけないのでは。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・単独世帯の増加や、外国人の増加等による世帯の変更で、ミスマッチがあるのかどうか。 ・家族向けの住宅を単独者用に出来るのであればそれを促進すれば、建てかえるの必要がなくなるかもしれない。その辺りの技術的なことも教えていただきたい。 ・単独世帯の増加や世帯の多様化が起こってきたときに、大阪府の住宅関係で一体何が対応できるのかということを整理した方がいい。 ・高齢者の入居拒否が問題になった際に、解決するようなサービスを提供することが公的

	<p>な役割になったが、今後、大量に外国人が入り入居拒否が起こった際に、大阪府としてどんな政策を打てるのか、高齢者の経験を踏まえ、できることを考えることが必要。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サービス付き高齢者住宅が増えることはいいが、質の管理が十分なのかということも課題では。 ・単独の低所得が多いとがあるが、高齢の単独者と若年の単独者では全く内容が違う。高齢の方は所得が低くても資産は多い人が多く、若年と同じように生活困窮者が多いとは一律には言えないと思うので、今後データをしっかり調べていく必要がある。 ・ネットアンケートで、高齢者や外国人が、どれだけ入ってくるのかは若干疑問があるので、工夫が必要では。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・単独者、ひとり親など、そういう方の属性をもう少し細かく見ていく必要があると思う。どういう地域に多いかは、所得や居住地によってというのはあると思うが、そのままにするのか、ミックスしていくような政策を打つかという空間的な広がり具体的な像みたいなものを調査の中に入れてほしい。 ・住宅だけ供給してサービスは他ということではなく、一緒にニーズや要件を把握し、政策の中で切り分けるなり、融合するということを考えただけならば。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・男女別でどうなるかが気になる。全国的なデータでは、高齢男性の単独世帯の増加が大きいという予測がされており、中でも未婚の男性がすごく多い。 ・未婚の単独は社会的なネットワークや、家族の繋がりがすごく薄く、孤立する危険性や、何かというときにサポートを得られないとか、そういう状況があると思う。 ・孤立や孤独死など、色んな問題があるが、社会的な関わりをどんどん増やしていきけるような、まちづくりとか、交流できる場を作ることを繋げて考えていく必要があると思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・単独世帯が増えていく社会は、住宅だけで解決するのは難しいことが多いため、少し周辺も含めて考えて、最終的に住宅で何ができるかという流れで見ていった方がいい。 ・単独世帯が増え小規模化・孤立化するほど、生活の基盤となる価値観を伝える機能が弱るので、それを地域の中で継承できるような、まちや住宅に対する愛着を育む機会がないと、ストック活用も進みにくくなる。 ・外国人居住者が増えていく社会状況も含め、教育的な要素との接点や、住環境の中で配慮すべき事柄というのは新たに出てくる領域ではないか。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・単独世帯が増えるということは、住まい方が次の世代に伝わらない可能性がある。 ・アンケート調査でもう少し先の見通しを立てるなら、例えば、単独世帯になることに対してどういう準備をしているかというような意識的なことを聞いてもいいのでは。 ・1人になったらどういうところに住むか、終活とか墓じまいとかについて、一歩先を含めて出してもいいのでは。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート調査で、最初から世帯類型で分けて何かを見ようとするのではなく、その個人がどういう状況であるのかの一つの要因として世帯類型を考えるという発想も重要。 ・アンケートの質問に、女性の働き方を支えるという論点もあっていいのでは。 ・ネットアンケートでは落ちる層があるので、どう補完するかを考えておいた方がよい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・古い住宅がどのぐらい残っているかということで、建築年や、どのぐらい経過した住宅が残っているのかというのがあれば検討の材料になると思う。
部会長	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅政策、まちづくり政策を組み立てるための議論と考えると、大阪府の住宅施策で何が対応できるのかということを確認しておく必要がある。

	<ul style="list-style-type: none"> ・戦後の住宅政策は標準家族を設定して標準的な住宅を作るということを中心に考えてきた傾向があり、固定化した世帯概念で検討が行われたが、個人をベースとした住宅政策というのはどういうことかについて、原点に戻って考えなければいけない。 ・シェアハウス等の話もあるが、空間的というと必ずしも住戸という概念が現在でも成り立っていないと思うが、世帯に対して住戸という発想でない様々な共同活動がある。 ・シェアエコノミーという概念に対応する住宅関連サービスとして賃貸住宅や、家具、設備関係のリースなど、空間のタイムシェアリングの問題もあり、また、いろんな意味で時間や空間や物をシェアするということを一方で想定しながらハウジングの活動というものを見ていくことが、個人化すればするほど必要になってくる。 ・高齢者の単独世帯を対象とした公的な賃貸住宅の中で様々な問題が出てきているので、現実の問題をベースにして、個人化の問題、解決しなければいけない問題というものをリアルな問題として探る必要もある。 ・住まい方自体が非常に多様化し、例えばネットワーク居住、拠点居住など、いろんな住まい方がある。24時間ほぼ同じところで暮らす方もいるが、生活空間が移動している、また、ある期間そういう移動があるという住まい方も特殊なものではなく、特に単独世帯はいろんな契機の中で、発生しやすくなっていくと思う。 ・文化的な問題は、これまで住宅政策としてあまり扱ってこなかったと思うので、世帯の動きとの関係の中で住文化の継承や発展との関係をどう捉えるかという観点も重要。 ・いろんな観点が出されたが、調査は、できる限り在来的な統計分析の枠に捉われず、新たな視点で、新しいことが発見できるような調査をしていただきたい。資料の分析も、従来の住宅の分析を超えた、もう少し自由な発想の分析をしていただきたい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人の増加への対策は、日本国内で集中して住んで問題が起こっている地域があると思うので、そういうところでいったい何が起きているかを調べておくことも必要。 ・外国人の入居拒否の話をしたが、逆に外国人を対象とした賃貸住宅や、大家も外国人というようなものが出てくるということも起こると思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅の流動性が少し欠けていて、世帯の形態が変わったときに住宅を替えていくというような暮らし方というのが必要ではないかと思っている。

(2) 住まい・まちづくりと健康との関係性

発言者	意見概要
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・断熱性能やバリアフリーは伝統的な規制の手段だが、まちづくりに入っているもので、うまく工夫することで、この部局でできる政策手段というものがあるのかという観点を、調査する前から考えていくことが必要。 ・何らかの住宅の規制や、高齢者の賃貸住宅の確保、住宅の確保を見た安全確保など、新しいサービスとその規制を提案すれば、それらの管轄はこの部局の政策手段に入る可能性がある。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・データを取るときに健康データを率だけではなく、可能であれば個人をリンクさせて分析しないと、面で見てもあまり有益な情報は出てこない、個人的には感じる。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・防犯とか防災の分野でセーフティーコミュニティというのがあり、大阪府下で、松原市と泉佐野市で実施されている。

	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅のバリアフリー化や、道がガタガタしているとか、住宅なり都市の問題である程度カバーできるのであれば、健康の調査にケガを入れていくのではと思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅のどこで脳卒中等が起こっているかを上げて、過去に起こったことを調査すると、将来のケガ等々が起こった場所との関連というのが見えてくるではないか。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・先ほどの世帯の多様化と重なりがあると思うが、人口動態や人口構造の変化と健康というの関連づけて論じていかなければいけない。 ・フレイルの予防といわれる高齢者が介護の必要な状況になるまでの予防について、まちづくりは大きな役割を果たしていると思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の抑うつ発症リスクにおいては、男性は一人暮らしに弱いと女性も一人暮らしに弱くないことや、男性は配偶者とだけ住むのがよいと女性も配偶者に加えて誰かがいる方がいいなど男女で結果が異なる。このようにステレオタイプに思っているものと異なる結果がみられるので、そういう思い込みを取り払った状態でデータを見るということが重要。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・健康というとお年寄りの問題が重視されてくる議論になりがちだと思うが、一方で、子どもの環境、健康というものと住環境の関係をもう少し取り組んでもいいのでは。 ・住宅関係の分析がかなり限定的な分析になっているので、広げておくことも必要。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの時代にどれぐらい健康的な生活をするかというのが、その後の健康格差を縮める重要なポイントなので、高齢者だけではなく、子どもあるいは子育て世代というのに対象を向けるというのも重要なまちづくりのポイントになると思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの居場所が、学校を離れたときに高齢者の居場所等と同じように存在するべきと思っている。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの虐待の問題が大きく、それが大人になってからの生きづらさや社会的孤立とものすごく強く結びついている。 ・子どもたちが虐待から救えるような環境も、住宅と密接に結びついていると思うので、考えていくべき問題ではないか。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・いわゆる1人暮らしではなく、孤立すると早く死ぬというのがデータとして出るのであれば、孤立しないようにというのは住宅政策でできるのでは。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ネットワークの大きさは個人のデータとして測れるので、それを見るというのも一つの方法。 ・健康という寿命だとか健康寿命という話になりがちだが、幸せ度とかワクワク度とか生きがいという、これまでに健康と関連あることが証明されたものがあるので、まちづくりの健康アウトカムとして「生活の中での楽しさ」みたいなものを持ってくるというのはよいと思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・住まい方が乱れている住まいが一定あると感じている。病院とか施設で、一定歩行機能とかが回復しても、帰る家の中の住まい方がめちゃくちゃで、とても帰れる状態じゃないとか。 ・そういう住まい方の部分が、アンケートとかに入れることができるかどうかはわからないが、一つの要素と思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・長く生きるより、よりよく生きるためにはどういう住まいのあり方が必要なのかという観点に立って、GISなどを作成すると豊かさみたいなものが出てくるのではないか。

	<ul style="list-style-type: none"> • データを個別のものとするとお互いにリンクさせるときに大変なので、複数の課題を同時に解決できるものはあると思うので、大きい視点でデータの扱いを設計すべき。
<p>部会長</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 従来のを、継承踏襲していくというより、健康の本質に立ち返って、特に最初の WHO 憲章の定義に従うと Well-being と言っていることが大事。良き生ということで、それが生きがいとか、私の言葉で言うと住みごたえということを使っている。 • 単に、医療・福祉のサービスを受けるとか、住宅のサービスを受けるとか、そういうことではなく、住まい手がどれだけ環境に関わることができるのかというそういうことの価値というものがやはり Well-being の本質と思う。 • 高齢者の問題が出たが、同時に子どもの問題が重要という指摘があり、子ども問題が住まい・まちづくりの部局で、どこからどう入っていけるかということと、住教育は最近いろんなところでチャレンジが行われ始めているので、そこを切り口にするのもあると思うが、もう少しいろんな可能性を検討していただくといいと思う。 • 子どものときに、どういう育ち方をしているかが高齢期のときに大きく影響してくると思うし、DIY とか、まちづくりとかは、そういう育ち方をしていなければ難しい。 • 今の子どもたちは学習することは非常に高いレベルの学習を効率的に受けていると感じるが、自分で問題を解決する能力とか、それから役に立たない教養、リベラルアーツというようなものを身につけるということに対しては今の大学生を見ると非常に偏った教育だなということを感じている。 • そういうことが住まいにも影響を及ぼしていて、基礎的な教養を持って、子どものときにいっぱい失敗をして習得した物が高齢期になって役に立つということが起こるような住教育というものを少し探ってみるといいと思う。 • 先ほどの課題と同じように、従来の政策概念が、施策に捉われずに、より広がりのある視点で、データをとるといことが大事だというご指摘、私もそのとおりだと思うので、できるだけ資料を集めて、1 番と 2 番のデータの構造自体が関係づけられるようになっていると、後で便利だと思う。 • 今後、事務の方で取りまとめという作業をしていくことでお願いをしたい。